
わずか 10歳で死んだ女の子

高坂桐乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

わずか10歳で死んだ女の子

【Nコード】

N6948C

【作者名】

高坂桐乃

【あらすじ】

この女の子は、わずか10年で命を終えました。10年の間、女の子は、何をしていたのでしょうか。そして、何を求め続けていたのでしょうか。あの子が生まれてきて、みんなが嬉しかったのに。自ら命を捨てた理由とは…。

第1章 二年生の時…わたしはすごかった。トビウオみたいだ…。

（前書き）

サスミファンは、見ないほうがいいです。

一応残酷じゃないように作りますが、

残酷には、一切する気はないです！！

苦情は一切受け付けません。

第1章 二年生の時…わたしはすごかった。トビウオみたいになっ

私の名前はサスミ。

ちよと物忘れははげしいんだけど、

頭は結構いいかんじかな？

- 彼女は10歳で命を終えるとは思ってもいなかった。
自分で、道を選んでいた。未来を考えながら。

彼女は「頭がいい」と自分でいえるのは、自分の道を
自分で選んでいるからだ。

普通のひとは、自分の道を、親とかに選んでもらっている。

そう、サスミは、最強に頭がいいのだ。

何故か、親は、頭は、それほどいいってわけじゃない。

サスミが二年生のころ。

サスミが始めてかぜをひいた日。

サスミは、病院にいつてから、登校することになった。

そのころ、学校では困っていた。

シレン「いないんですかー？ 9×9わかるひとはー。」

キララ「ヒントはー？」

シレン「9の段のかけ算を言ってみて下さい。」

リク「あつ、じゃあ、 9×1 は、9で 9×2 は17。でー 9×3 は

……なんだろう？」

シレン「ちがいますよー。」

キララ「シレン先生ー。 9×6 まではいくんですけど、あとがわからなくて。」

サスミ「おはよーございますー。」

リク「あつ、サスミさん（あんま親しくなかったから、「さん」をつけて呼んでいた。）

彼女ははいるなりこう言った。

サスミ「 9×9 は81ですよ。シレン先生。」
教室中が固まった。

みんながわからない問題を一瞬でといたのだから。
シレン「サスミさんがきてくれてよかったなあー。」

第1章 二年生の時…わたしはすごかった。トビウオみたいにな…。

（後書き）

この小説はシレンのキャラクターやオリキャラが登場する

第2章 はじめてのいじめ。 自由長をもらったサスミ。 私は心の形を直す事が出

サスミといってもテンミリオンのリンにも似ているかも……

第2章 はじめてのいじめ。自由長をもらったサスミ。私は心の形を直す事が出

第2章 サスミははじめていじめにあった。

いじめ - それはすごくいやな気持ちにさせる。

ヒリィ「すごいね。サスミちゃん。」

いつも居眠りヒリィだけど、サスミが何か言うときいてくれる優しい子だった。

サスミ「ありがとう。」

3年生に上がった日。

サスミ「で、これが「自分でアップ」のドリルか。」

で、何〜！？ 二年の復習っ！？ですか？

かんたんじゃんwこんなの。

でもっ…。「毎日ドリル」だって〜！？

なに〜！？

かんたんですなー

サスミには、気になる子はいた。

そう、あの子…ヒ・マ・キ・チ君。

まもなく、三年生の夏はおわりかけていた。

そのころからだ。私の心が、壊れていったのは。

ガラハ「サスミとかいうやつ、自分で頭いいとおもってるらしいぜ。頭いかれてるんじゃないの？」

子分「たしかにたしかに！」

サスミは聞いてしまった。あいつら（ガラハ）のこと等を。

* * *

【自由長をもらったサスミ。私は心の形を直す事が出来た。】

秋がきた。風が、通り抜けるように。
私の心が壊れていくかんじで…。

オヤブン「あの…。サスミさんですか？」

サスミ「あ、はい。そうですか。」

オヤブン「あのっ、コレ受け取って下さい。」

オヤブンが渡したのは、

真っ青な空に真っ白の雪 -

そして、何故か赤いチェックの自由帳。

オヤブン「私キルスの父なんですが。」

そして、私がキルスのノートを読んだんですっ。

そしたら、消えそうな雪色の文字で、

うすかったけどはつきりと、

「サスミはバカ」

とかいてあったんですっ。

そして、この日記帳に絵をかきました。

よかったら、毎日かいてください。

サスミ「わかりました。お姉さん。私、このノートに、つらいことも嬉しい事もかいてみます。」

第3章 フウライタウンに雪が降った

第4章 フウライタウンに雪が降った

第3章なんだけどな

s a r i n a
d o f t h e f u t u r e s u r e l y h e l p s
t h o u t g i v i n g u p w h a t . s i n c e G o
i w i l l a t t a c h a n d p r o g r e s s w i

ページ目につづいてあった。

サスミには意味はわからなかった。

一月・このフウライタウンに、

生まれて初めて雪がふった。

チンタラ「雪、ふったね。」

サスミ「うん。」

デブータ「綺麗」

サスミ「そうだよね。」

マーモ「あのお。ちよつといい？」

サスミ「うん。かまわないよ。」

マーモ「こんど、会おうよ……。」

サスミ「うんいいよーおマーモちゃん元気なーい。」

マーモ「もともと。かな？」

サスミ「そうだったんだ」

オリキャラ紹介

ヒリィ 性別 女 説明 いつも居眠りしているが優しい

第4章 知ってしまったの…私…

家にかえると、

母と父が話している声が聞こえてしまった。

母「あのこ、寮にいたらどうかしら？」

父「ああ、ちよつと障害があるよなー。」

母「市の、電話サービスで、障害者の寮をさがしてみしようか。」

父「障害者はどっかいつてほしいよなー」

サスミ「母上、父上、ひどいよ。」

私が障害者……？私は障害者……。」

涙…。私は生きてていいのかな…。

障害者は、悪気もないのに、変な事をする人…
顔も変で…。

- 涙は 涙は 流していいもののですか？ -

私は、家を出ればいいのよね、そうよね！？

怪力で障害者だなんて、こんな所にいたら
いても愛されない…。

どこにいけばいい？保健所？それとも…。

頭はいいと思う…。考えられる。少なくとも…

私は、自分の部屋の「ハーブティ」の本の196ページに入ってる、電話書に、

それと、充電中のケータイ、

それから、リュック、金、食料……

それから懐中電灯・・。

あと、地図。

自転車、鍵・ヘルメット？

こんな物でいいのかな？

とにかく家にはいらなきゃ。

- 私が私でいられる時間 -

”ハーブティ”がない……！？

ハーブティがあつたところに電話書がのこしてあつた。

よかった。

ケータイは……。

ここのバックにいれてたんだっけ？

リュックはこれでいいな。

金はいっていた -

入れたっけ？

地図も -

そして食べ物まで -

懐中電灯は何処？

そう思った時 私はつまずいた。

「何コレ？」

へっぽこな、「かえるかいちゅうかえるでんとう」

私ってばバカっ、かえるってゆーのつけすぎー。

よしっ、

ガタン

その時私は -

第5章 あたらしい町へ…その名も（前書き）

更新遅れすぎ、すみません

第5章 あたらしい町へ…その名も

第6章 あたらしい町へ…その名も

キララ「サスミ、なにしてるの……？」

サスミ「……。」

キララ「い・え・で？」

サスミ「キララには関係ない。じゃあね！」

ごめん…キララ… 怒るつもりじゃなかったんだ。

私、頭がミョーに…

- つかれた -

キララはどこだろう…。

さっきでっていったばかりのキララを思い出しながら、ぎしぎし
いう階段をおりた。

ここの階段ともさようなら…。

階段と別れたかった…いままで…

小さい時の記憶がもどってきた。

母におとされた…

いまもまっしろな壁に、あたったときついた
「血」があつた -

もう思い出さない…ずっと…
ずっとずっと…。

- 死ぬまで -

死ぬもんか。

ガッタン

ふるい玄関のドアが閉まつた。

調子が変わるい…どうして？
どうして？どうして？？

- 私のストレス -

それは、ストレスだよね……

店主「きつぷみせてください」

- サスミは、胸のポケットにしまっておいた
きつぷをわたした -

これも新しい始まりなんだ -

どーゆー子がいるかな…。

私は、クリスタルタウンに移動しながら
何回もつくづく思った -

電話書だ…

忘れかけていた -

- - - - -

盗賊番

店主

マムル

チンタラ

ねずみこぶん

回復屋

美女と野獣（おい！）

- - - - -

サスミ「チンタラさんにかけてみよう。」

えと635 - 185 - 5225

プルルルルルル…

第6章 私は死ぬんだ…死にたいんだ!!

私のホームページを
みた。

- ! 荒らしだ。 -

「サスミは馬鹿みたい。一人で頭良いとか言っちゃってるしさ。」
「お前、この世から去って逝って欲しい」
「死んだえば良いじゃんお前なんか。死ね」

私の個人情報、まるだし。

キルスだ。絶対。

私は、学校に行く…。

机に

「サスミは、馬鹿みたい。ひとりで頭いいとか
いつてるしさ。」
とかいてあった。

引き出しの中の紙に
「死ね」とかいてあったし…

あたし

死のうかな……。

私は、十歳になったら、死ぬ。自分から。
そして、あの世に行く。
しあわせだよね……。多分。

ワタシナンカ、イテモメイワクヨネ……。

もう、明日が誕生日。
10さいの。そして、

おわりのじかんがくるの……
もうこのよにはわたしはい
なくなつて……。ね。

魂がのこるんだつた……。そう、すべてはおわりじゃない。

この世にはみえなくてもわ
たしの魂は生きたまま。

そうなんでしょ？カミサマ。

もう死ぬのも時間の問題で……

母、父から逃げられるのも時間の問題。

私は死ぬって決意したんだから
- あした、あの場所。 -

もう明日はきていた。十年いきてそれで

- おしまい -

魂を残して私は死ぬ

死ななきゃならない。

そう、ここで。

キララが知らぬあいだに！！
キットね…。

あの崖で死ぬんだから。

小さい時川でおぼれさせられた、あの場所。

サスミは落ちた……。

キララ「サスミ！……！！！！！！！！！！」

私が助けられた？シニタイノ。
お願いだからそのてを離して。

キララ「死んじゃダメ！！！！！！！！」

- 死んだはずなのに -

私はサスミのてから離れて、
川へ落ちた。

新第1章 天国って言うのは…。(前書き)

この小説の更新スピードがガクンと下がります。

かなりの中編小説で大体半分以上物語が進んでいるのであとは半分以下でしょう

新第1章 天国って言うのは…。

ここは何処？天国？

そうみたい。私は天使みたい。

あれ？リクとキララがいるよ。なんで？

私は天使ではなかった。人間だった。

夢かな？つねってみた。

痛い。

ここは何処だか私は誰だかわからなかった。
見えるのは、花畑。

キララが花をつんで、
私にくれた。

なに この花

私を不思議な気持ちにさせてくれる…。

見えないよ…あたしの眼。

目の前まっかになって、私の体もなくなっていた。

あなたは誰？だれなの？

私を暗い気持ちにさせる…。誰？誰？

私は死なないって信じ続けてたじゃない…。

- 違う。

死のうと思ったんだよね…？

それで…

私、死んじゃうかもしれないのに…。

私、家出したのよね。

母と父が

搜索願い出したの…！？

こんなところで

あんなくらしに戻るのは

嫌。

私は何をすればいいんだろう…。

戦う。私は戦う。

雨が降ってきた。

でもあたしは戦う以外に選択しがあることを
知らなかった。

戦ったら、あたし、死ぬんじゃない。

どうせ 死ぬ世界、ここは地球。

この世もあの世も誰かの魂があることは同じで
そしてこの世界は魂がある。未来もある。

どうせ死ぬんだったら、もう少しでも生きていよう
戦いだなんて恐い事はしないで、

私は元のくらしにもどったら

私はつらい

つらいけどその「恐ろしさ」に負けてはいけない。

「サスミ」私の名前、ずっと前、十年前

私の家族がつけてくれた名前…。

私には母親と父親と…あと一人

だれだっけ。いつも面倒見てくれたのに

忘れてごめんその謝りで、すんだ

あの子に恩返しをしたい…けど

あのこは死んだんだ。

私が死ねばみんな 悲しむ

現実はそのような生き返ろうって生き返れる

世界じゃない。

私は、死んだに決まってる。

私はあの世に旅立って逝った。

振り返った。わたしだっといういいことあったのに。
私だって…。

でもなんで？なんでリクがいるの？

あの子、家族、姉

それはリクだったんだよね…

リクまで死んだの？なんで？

あの学校が見える。校庭が見える。
魂が見える。みんなの。

…そんなトコいると濡れちゃうよ…

なにこの言葉…。私、なに思ってるんだろう
雨もふってないのに…。

ここは校庭じゃない。

御葬式する場所。だれか死んじやったのかな？

名前は…あたし！

なんで？私はここにいますよ。

そっか。私死んだんだよね。

新第2章 私にまたあの光が。

体を、神からもらおうか。

なんの体？人間？

サスミと同じ子をください

- サスミと同じ子をください -

私は私なんだから、私をやりなおしてみたい。
虐められた事も障害なのも全てやりなおして。

でも、あたらしい体の私をみたらどう思う？
同じ姿の私がいたら…

あの死体はなんだと思う？

私は私だけど、

姿はかえておこう。でもっ

そんな姿じゃ私だって信じてもらえないから

サスミの姿でいてください -

私のまわりにホイミみたいな光りがきた。

新第3章 人間の世界…？

人間の体ってこんなにあたたかいのね…。
リクにもこれしてるかな？

秋色の服きてる
リクだ…。私の家族…。
リクは本をあふれるほどもって急いでいる。
って 私が落ちるー！？

ど
し
ー
ん
い
て
て
！

リク「ったー。」
何？今なんていったの？
眼を閉じてたから聞こえないってことはない。
リク「あつ、本があ…。」

リクは振り返って

リク「なんか知り合いに似てるね。」

サスミ「私よ私。小さいころからあなたのそばにいたじゃないの。」

リク「…。誰だっけ。」

サスミ「サスミよ。サスミ。私は。」

私は話をとめた。

そんな死んだ人が生き返る話なんて聞いたなら

恐ろしいよね。

サスミ「…。あのこは死んだのよ。」

生き返っていたらいいのに…。

リクがかりていたのは

「人はなぜ、弱い生き物なのか」

「- A life does not return - 命は戻っ

てこない。」

サスミ「リク…。私を信じて…。」

（テミの気持ちにナレーションをかえました。）

リク「何故私の名前を知ってるの？あなたはもしかすると…。」

- サスミかもしれない…。 -

だってあなたは、天使のように笑って

遊んでいたらリンは「ばか」あ」

とか言って私を困らせた。

母には「サスミの姉ということを言うな」って

いわれた…。

ここにいるのは、サスミかもしれない。

きつと妹のサスミだ。

あたしはあたしの時間を生きる
やせた黒板にサスミが
笑顔で
あたし見つめながら
嬉しそうに
事業始める

あたしは生きていたのに
あのこはいない
この黒板だけが残されて
あたしの眼の中では
あたしの、涙が
あふれでながら
あたしは今日も

あのこを探し続けた

リク「サスミかもしれない……。」
サスミ「私は……私はサスミよ……！！！」

あのこの命はもうないの？
それとも生き返ったの？
そんな話は あるわけない
サスミはもういないのに
あたしは取り残されたの？
それとも

神様は私の幸せに力をかしてくれるの？
自ら命を失ったんでしょう？

なんで自ら生き返りたいって思ったの？
それは謎にまつまれたままだった

キララ「サスミだよね？なんで？魂？」
リク「わからな…」

サスミ「私が説明します。」

最終章 世界は散って

そついたらスクリーンがやぶけたみたいに
私の頭からその場所は散った。

ここは何処だろう。

あの世はなかったの？

これは夢？

- - - - I am sorry to have lost
the life myself. - - -

（意味：生活を私自身失って、私はすまなく思います。）

I want to redo once again. - L
ife

Thank you for becoming me. I a
m having been one person.

（意味：私は、やり直したかったの。

あなたが私を動かしてくれたのよ。そうよ。

私は1人だったの）

I am having become an actress
and having swarmed. It is that
the mother was killed and I w
as able to find the useful way
which it was hard on me and
ied but. You found it. I am -
God. It is heavenly God.

（サスミから：最後に：

私は、女優になりたかった。

母親が死に、

私が、自殺。

私は本当は神だったの。私は天国の神です。
私は、貴方を見守ります。
そして

- - - - -

私は、ざぶとんだらけの所に
埋まっていました。

「サスミって誰？」

どうやら

夢をみていたようです。
凄く長い。

お姉ちゃんの部屋に行くと

お姉ちゃんは学校にいく準備をしていました。

「亜梨沙、金曜から2週間も寝ていたのよ。」

わたしはびっくりしました。それは
この夢は、宿題の課題にしようと思っています。
リンちゃんは…英語が得意なのかな？
わからない。それは今も。私にも。

「さーてと、今日は学校やすんで、この
小説かくか！」

「『家ですして』…」

「『ここは何処？天国？』でしょー？」

「でーきたー！」

その後は気になるなあ…。
私が描こう。

緑色のノートに
タイトルをかいた。

次の日

「種村 アリサさん」

「はぁーい」

「すごいいい小説でした。秋の小説大会に
だしました。そして、『あなたは作家になりませんか？』
って。」

サスミ、貴方のおかげで私の夢はかないました。
また私の前に現れてね。19才のサスミ…。

エピソード

サスミはキララの暖かい手を離れた。
そしたら私は、魂ものこらなかった。

天国はただの幻想で

もう失った命はもどってこないの -

私は19歳になった。16歳で命を失って。

時間はすすみつつけるけど、私は

もう動かない。

後悔している。死んだ事。

私はもうちょっと生きててよかった。

ジカンハモトニモドラナイノ？

聞いても聞こえるのは草の音だけ。

それから10年たった。

私の前に本当の母が現れた。

でも時間はもどらないの。

いい時間に生まれなかった。

[illegible]

It	is	tired	of	walking.	Rain	i
t	s	t	a	r	t	s
t	s	t	a	r	t	s

hold. A rabbit is driven off.
Your eyes to the extent that
this transparent atmosphere
bottom Water which is carrying
out the breath I am called. It
calls. World which is here. It
will be filled, if it goes to
where and will go.

私の時計はとまっていたまゝ。

THE
END

応援ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6948c/>

わずか10歳で死んだ女の子

2010年10月12日03時06分発行